

Tomoko Iwasawa,

“*Tama* in Japanese Myth

—A Hermeneutical Study of

Ancient Japanese Divinity”

(『日本神話における「たま」

——古代日本の神観念を探る』)

岩澤 知子

本書は、西洋において未だ十分に紹介されたことのない日本神話(特に『古事記』)をテキストとして取り上げ、これを西洋哲学の方法論である現象学的解釈学の視点から新たに分析することを通して、日本の原初的な宗教意識のあり方を明らかにするとともに、その原初的意識のさらに根底に横たわる、人類にとってのより普遍的な価値を探ろうとしたものである。

日本人の宗教意識を分析する際、これまでの西欧の研究が中心に取り上げてきたのは「神」の概念である。しかしながら、この「神」の概念はしばしば西欧的Godの

概念と混同して議論されるがゆえに、誤解を招くことが多かった。西欧の超越的一神教の立場からすれば、超越神でも、唯一の創造主でもなく、人間と同じように生まれては死んでいく日本の神々は、非論理的で野蠻な思考の産物としかみなされない。こうした西欧の誤解に対し、本書は「たま・たましひ」の概念を分析することによって、日本人の宗教意識をより正確に叙述することができると主張する。

本書は前半の歴史的考察(第一部)と後半の解釈学的考察(第二部)から成る。第一部では、「たま・たましひ」が日本的宗教体験に占める意味を日本思想史上初めて学問的に考察しようとした江戸の国学運動に焦点をあて、「たま・たましひ」の概念が歴史上当のように解釈されてきたかを明らかにする。第一部の歴史的考察を踏まえ、第二部では、偏狭なナショナリズムに陥ることなくそれぞれの文化に固有な宗教意識を掘り起こすことの意義と方策を、二十世紀の現象学的解釈学がもたらした新たな神話理論に基づく日本神話解釈を通して論じる。具体的な日本神話解釈にあたって

は、現象学的解釈学の主要業績のひとつである、ポール・リクールの『悪の象徴論』が提示した「西欧神話に現れるユダヤ・キリスト教的『悪』の意識の発展段階説」と対比しながら、日本的宗教意識の特徴を分析する方法をとっている。

リクールによると、西洋における「悪」の意識は「身体性」と強く結びついていて、人間に悪をもたらすのは「身体」であって、この反秩序的・反理性的「身体」をいかに乗り越え「精神」が自律を獲得していくかが、長い西洋の歴史を通して理性的人間に求められてきた葛藤であったことを、彼は西欧神話の解釈を通して明らかにしていく。こうした身体蔑視の西欧的世界観・人間観に対し、日本神話は身体に秘められた力が人間の不断の世界観構築に及ぼす根源的かつ有機的な意義を強調する。日本神話に独特な、この精神と身体が分かちがたく結びついた状況を象徴するのが、「たま・たましひ」という概念である。本書は、日本神話や祭儀に現れる「たま・たましひ」の諸相を分析し、日本的「精神と身体との円環的弁証法」を再考することを

通して、西欧的心身二元論の立場を相対化  
するとともに、この二元論を越えていく道  
を拓くことを目的としている。

[University Press of America, 2011]